

現代心理学編 第3部 第三の教育ムーブメント

全5巻

監修 ● 筑波大学教授 大内茂男
■ 時間: 各巻 約25分

・お問合せ・お申込みは
有限会社 博映商事
TEL 092-741-0306 FAX 092-741-6628
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-31-220
【HP】 <http://hakuei-shoji.jp> 【E-Mail】 info@hakuei-shoji.jp

1 その理論と治療教育の実際

〈指導〉 横浜国立大学 小林芳文

●カラー

子供の発達分野において、新しい学問として注目されている「ムーブメント教育」は、いはゆる訓練とは違って、楽しく遊ぶことで、自ら発達していくという古いようで新しい教育である。体を動かすことが単に体づくりに役立つだけでなく、知的機能や情緒機能も含めた人間の心理的諸機能に重要な手がかりを与えるという、発達の基本原理が幼児や障害を持った子供の教育に意義があるといえる。ムーブメント教育の基本は、心理は体と分離しては考えられない、体と心を合成した学問である。

この作品では、実際に行われている現場等を通じて、学問的に理論づけながら障害児教育にたずさわる現場教師や関係諸先生にわかりやすく解説したものである。

2 発達の診断と指導アセスメントの方法

〈指導〉 横浜国立大学 小林芳文

●カラー

障害児の治療や発達援助を目指して、ムーブメント教育を適切に行うためには、感覚運動能力の発達はもとより、「からだ」、「こころ」、「あたま」の全体発達を把握することである。また、動き作りや身体意識の形成のためには、動きの要素を分析したり、動きの属性を考慮に入れた評価が必要である。

ここでは、MEPA（ムーブメント教育プログラムアセスメント）と、MSTB（ムーブメントスキルテストバッテリー）などの利用の方法と、プログラムの作成の仕方についてふれてみたい。

3 重度障害児の感覚運動

〈指導〉 横浜国立大学 小林芳文

●カラー

私達の発達は、体の内外に分布・位置するさまざまな感覚の働きをベースに進んで行く。障害を持った子供は、感覚の機能が十分に発揮出来ないままにすることが多く、これにより、身体意識の形成が遅れたり、動きの発達が阻害されたり、知覚の能力が未熟であったり、更には健康の力が出せないままにいる。

ここでは、重度の障害児の発達をムーブメント教育によって、どのように援助したらよいかふれてみたいと思う。

4 精神遅滞児の動き作りと知的発達

〈指導〉 横浜国立大学 小林芳文

●カラー

精神遅滞児の発達教育として、近年ムーブメント教育が世界各圏でとり入れられてきている。ことばの遅れ、概念形成の貧しさ、創造性の弱さ、集中力の弱さ、そして動きの能力の低さなど心理的、身体的能力で遅れを持つ子供の教育にムーブメント教育の果たす意義は大きい。

ここでは、「動くことは、自分を知ることであり、世界を知ることである。」という考えのもとで、まず動き作りの実際を紹介する。この動きが拡大することで心理的諸機能も発達する。特に、ことばの発達にむけてムーブメント教育をどう進めたらよいかを考える。

5 ムーブメントによる幼児教育

〈指導〉 横浜国立大学 小林芳文

●カラー

幼児の発達は、手や体や目や耳という全ての感覚を働かせ、そして情緒的な解放と喜びにつうじる、遊び的要素をもった豊かな活動の中から育っていく。フロスティックは、幼児期こそ机の上の限られた感覚を使った教育でなく、体の全ての感覚を総動員した教育、つまり「第三の教育」としてのムーブメント教育の必要性を述べている。

ここでは、フロスティックの発達理論とムーブメント教育の達成課題を合わせて、おおよそ1～2歳児、3～4歳児、5～6歳児を中心に、発達を援助するための方法について考える。